平成 28 年度第 4 回（通算第 27 回）「新袋井フォーラム講座」の記録

・日時：平成 28 年 2 月 4 日（土）
13 時 30 分～15 時 30 分
・場所：メロープラザ 2 階会議室
・講師：**三木英明**さん
（自営・種苗業、元青年海外協力隊員）
・演題：**インドでの 2 年間**
～46 年前の経験は今私に…～
・参加者：42 名
・主催：新袋井フォーラム・袋井市教育委員会

【以下講演要旨／文責編集部】

私は今から 46 年前の 1971 年 3 月 30 日から 73 年 3 月 29 日まで、青年海外協力隊員としてインドに行っておりました。

行ってみた感想として思うことは、結局インドのことはよく分からない、ということです。なぜ、あのようになっているのかについては考えてもよく分からないことがあります。また、2 年間滞在しても 1 日滞在したのと変わらないという印象も持っています。昨日も今日も明日も、毎日が同じで、何も変わらないからです。

それでも、日本とは大きな違いがあることは、すぐに気が付きます。逆のそのことから、日本のことをより深く正しく知ることができます。海外に行くことの意味は、そこにあるだろうと思います。

例えば、日本と違ってインドでは、州によって言語が違います。公用語となっているヒンズー語でさえ人口の 47%の人しか話すことができません。私が滞在していたのは西ベンガル州ですが、ここではベンガル語です。しかし、違う州に行くと言葉が通じません。全部で 29 の州がありますが、あたかも 29 の国があるかのようです。

46 年前のインド

インドに着いて初めは首都のデリーで 1 週間程オリエンテーションを受け、その後、赴任地である西ベンガル州へ派遣されました。ここへ行った協力隊員は私を含め 2 名のみです。州の中心都市であるカルカッタへ行き、大きな駅に着きましたが、そこで初めて異様な体験をしました。駅には乞食が沢山いまして、日本人だと分かるとお金を乞うために集まってくるのです。病気で働けず、乞食になった人も大勢いて、彼らが集まってくるのですが、その体臭というのか何なのか臭いに耐え切れず、私は思わず嘔吐してしまいました。

それ以外にも、日本では考えられないような貧しい生活をしている人たちのことを知り、20 世紀の日本から来たはずなの、いま自分は本当にその時代に居るのだろうかという錯覚さえ感じたほどです。

私は果樹園芸の技術指導員として派遣されましたが、主に仕事をした場所は西ベンガル州バンクラ県のボルクラという部落です。県の中心であるバンクラの町は、まだ町と言えるところですが、そこから約 10 キロ離れたアチェリという村で暮らしながら、アチェリの北にあるボルクラに通いました。アチェリでは修道場の敷地にあるレンガと土で出来た藁葺き屋根の建物の中に 1 室を借りて住んでいました。噂には聞いていましたが、部屋の壁には牛の糞を水で溶かしたものが塗られていて、かすかに臭いがしました。

家の壁は 40cm 程の厚さがあり、窓は小さなものが 1 つだけです。そのような作りでないと、暑さを凌げないんです。後に首都デリーにある日本の大使館に招待されて行ったことがありますが、そこの建物は日本式に作られていて、壁の厚さはインドの建物よりも薄く、窓も大きくとっているので、外気の暑さをシャットアウトできないんですね。そのため、クーラーをガンガンに効かせても、涼しくならないことさえあるようです。大使自身が、この建物は失敗作だと言っていました。日本式に作っても、現地では役に立たないんですね。やはり、現地では現地のやり方を真似するべきなんです。

私の住まいにはトイレがありましたが、そこに紙は置いてありません。代わりに水を入れた容器が置いてあります。インドのトイレ

では用を足したあと、自分の左手で汚れを落とし、その手を水で洗うだけなのです。だから左手はインドでは不浄の手であり、食事の時は、その手で食器を触ることさえタブーです。しかし、家にトイレがあるのはまだ良い方で、普通のインドの家にはトイレもありません。みな、その辺りの茂みの中で用を足すだけです。茂みには水を入れた容器は置いてありませんので、自分で空き缶などに水を入れた物を持って、それで茂みに行くのです。用を足した後のものは、いつか野豚がやってきて全部を綺麗に食べてくれます。うまく出来ています。

ベランダに住む家族

私が住んでいた部屋の外はベランダになっていましたが、ある時、そのベランダの方から赤ちゃんの鳴き声が聞こえてきました。夫を亡くした女性が 4 人の子どもと共に、そこに住み着いてしまっていました。この家族とも 1 年半ほど付き合うことになりましたが、夫を亡くし、家もなくなり、このような所に住むしかなかったんですね。しかし、ベランダですから、トタン屋根はありましたが、吹きさらしの所です。レンガだけのゴツゴツの床に、この一家が生活しているのです。

この世で何が辛いかと言われれば、その日の食べ物され食べられるかどうかという心配をすることほど辛いことはないと思います。この家族もそうでした、夫がおりませんから満足な収入もないのでしょう。

ある時、この一家の男の子が、線路を歩いているのを見たことがあります。腰に大きな籠をさげ、長い棒を持っていたのですが、そこに長い貨物列車がゆっくりやってくると、男の子は長い棒を列車の方に差し出しました。すると石炭がボロボロと列車から落ちてきて、それを籠に入れて持ち帰るのです。棒の先にはお金が挟んであって、それを列車の機関士に差し出すと、それに見合っただけの石炭を落としてくれるようなのです。石炭は乗組員の私物であるはずはありませんから、勝手にそうやって、お金を得ている訳です。石炭を持ち帰ったその子は、私の所にやってきまして、燃料としてこれを買ってくれ、と言うのです。私は一部始終を知っていましたが、そう言われたら、これはもう買ってあげない訳にはいきませんよね。彼らは、一日の食べ物を得るために、そのようなことをしなければならない程なのです。

今の日本人の中にも、貧しいと言う人はいますが、インドのこのような人たちと比べたら、日本の貧しさなど本当の貧しさとは言えないのではないでしょうか。本当の貧乏とは、家もない、着る物も、そして食べる物もない、何もないというレベルのことを指すのです。自分で貧乏だという日本人の中に、そのような人を見たことがありません。日本人は恵まれています。

このベランダの家族の食事はといえば、底がデコボコになった金属製の大きなお皿が 1 つだけあって、そこに重湯（おもゆ）が流し入れられているだけです。同じお皿の横に、塩が少し置かれていて、さらに青唐辛子が 1 本だけありました。それを 5 人で食べるのです。重湯ですから右手で掴むことなどできませんから、手のひらを、そこにつけて、その手を嘗めるのです。これが本当の貧しい人の暮らしであって、貧しさのレベルは日本人の想像を超えていると思います。

この家族の子どもたちとも親しくなりましたが、それ以外にも多くの子どもたちが私の宿舎に遊びに来るようになりまして、すぐに仲良しになりました。画用紙にめちゃくちゃな絵を描くと、子どもたちから、これは何だ、という現地の言葉が直ぐに飛んできます。初めはその言葉の意味が分からないのですが、しばらくして、「これは何か」と質問しているのだと分かり、私も、いろいろな物を指差しながら、ベンガル語で「これは何か」と言いながら、単語を覚えていきました。現地の言葉、ベンガル語は全く分からないまま、この地に来たのですが、そのようにして現地の子どもや現地の人びとと付き合いながら言葉を覚えると、3 ヶ月後には、1 人で買い物もできるようになりました。1 年で、日常生活が困らなくなるくらいになりました。どの言語でも同じではないかと思うのですが、言葉を覚えようと思ったら、その場に飛び込んで生活してみるのが、一番よいのではないかなあと思います。

農民に向上心がない理由

ボルクラの部落が私の仕事現場で、そこで農業の指導を行っていました。現地のある農作物の種類は、殆ど日本と変わらないものばかりでした。ただ、そこで行われていたのは農業という感じのものではありませんでした。種は直播きで、しかも、あまり育たないのです。土地が痩せていました。本当は、現地で大豆を作りたかったんです。人間にはタンパク質の摂取が必要不可欠ですが、インドの人はそれが不足していましたので、大豆なら植物性の良質なタンパク質の補給が可能になります。それで、見本として大豆の製品、黄な粉とか、味噌汁、その他を食べてもらったのですが、現地の人は口に入れたら、それを直ぐに吐き出してしまうんですね。口に合わないようなのです。それで、これはダメだと諦めて、痩せた土地でも収穫しやすいジャガイモから始めました。

それでも、不思議に思ったことは、これこれこういうことをやって大いに収穫量を増やそうではないか、と農家の人たちに語りかけて奮起を促すのですが、彼らは一向に乗っかろうとする気配がないんですね。

その理由は、カースト制度にありました。身分制度ですね。インドはいま、これを時代錯誤のものであるとして廃止しようという方向に向かってはいますが、果たして完全に無くなるかどうかは分かりませんね。インドは昔も今も、この身分制度によって、世襲的に仕事の役割分担が決まっています。カーストの上の人は、カーストの下の人がやる仕事は絶対にしません。身分が上の人から見ると、身分の低い人の仕事は、不浄なものという評価なのです。仕事だけではなく、身分の低い人それ自体も不浄なものと考えていますので、身分の低い人に触ることもダメなんですね。そういう厳然たる身分差別がインドにはあります。

仕事も、身分によって決まりますから、基本的には自分に与えられた仕事しかしません。例えば、車の運転手は、運転の仕事をし終えたら、どうするかというと、そのまま車のシートに座っていて、次に車を運転するまで待つだけなんです。どこかの役場へいくと、書類を運ぶだけの仕事をしている人がいて、運び終えると、あとは、そのままずっと立って待っているだけなのです。掃除をする人は掃除だけをする、何々をする人はそれだけをする、というように、細かく仕事が分けられて、しかも、1 つの仕事は 1 人の人しかしないというのが基本なのです。

その中で土を扱う農業は、身分が低い人が行う仕事なんです。土を不浄なものと見なすようで、カーストの上の人は土に触ることさえしません。つまり農業に従事している農民たちは、身分の低い人ばかりなのです。私が指導をしていたボルクラの部落の農民もそうです。彼らは身分が低いので、自分の農地を持っているわけではありません。農地の所有者は大地主であり、その地主は身分が高い人なので、自分は土地を所有するだけで、農作業はしません。身分の低い人に作業だけさせて、収穫は全部、地主のものになります。農民たちは、地主から、今日一日分の賃金を与えられるだけであって、沢山、収穫物を増やしたところで、自分が手にする手当てが増えるわけではないんですね。だから、私たちが、頑張って収量を増やそうと叫んでみても、現地の農民たちは何の話かと言わんばかりに上の空で聞いているだけでした。私たちは、彼ら農民の生活向上のために、と思って、やっているのですが、彼らの反応がそのようでしかありませんでしたので、何のために来ているのだろう、と思ったこともありました。

結局のところ、2 年間滞在して農業技術の指導をしたとは言っても、本当に現地の人たちのためになるようなことがどれだけできたか、と考えると、何も出来なかったんではないかというのが正直な所です。それでも、私個人にとっては、異なる文化や生活レベルの違いを知ることができて、大きな経験になりました。とりわけ、インドを知ることで、日本のことを見直すことができました。それが私には一番の収穫でした。

私の話は以上です。本日はこのような機会を作って頂きまして、誠にありがとうございました。これで、ようやく青年海外協力隊員としての務めの 1 つを果たせたかなあ、という気がしております。ありがとうございました（涙。大拍手）。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

（質問）インドの人は頭がよくて、2 桁の九々も出来ると聞いていますが、実際にインドに

行かれて、その当たりはいかがでしたか？

（**応答**）確かにインドの人は頭がいい人が多いらしいですね。でも私が赴任したのは田舎でしたし、一緒に仕事をした農民の人たちは、先ほども言いましたようにカーストの下の人でしたから、その人たちと接した実感としては、残念ながら余りそういうことは感じませんでした。

（**質問**）現地での対日感情はいかがでしたか？

（**応答**）西ベンガル州はチャンドラ・ボース（独立運動家）の出身地です。イギリスから独立するために活躍した英雄ですから、現地には銅像もあります。また、同州出身者でもう一人、ビハーリー・ボースという独立革命家がいます。彼は日本に亡命していたことがあり、新宿の中村屋にかくまわれていましたね。この 2 人のボースが日本と関わりがあります。また、結果として失敗に終わりましたが、イギリスからインドを開放するため日本軍はインパール作成を実施しました。西ベンガル州辺りでも作戦があったようです。そのことを現地の人は今でも覚えていて、かつて日本人は私たちのために戦ってくれたんだ、と言って、私にも非常に親しく接してくれました。インドの全部が同じかどうかは分かりませんが、私が行った場所では非常に日本人に親近感を持ってくれていました。

《参加者の声》

・46 年前のお話とはいえ、三木さんの熱意のこもったお話に、知らず知らず引き込まれてしまいました。三木さんは、思いやり深く、正義感の強い方で、同じ日本人として誇りに思えるような方でした。ライ病により手指や鼻の欠けた人たちに囲まれて困惑された話や、水のような重湯を母子で食べる様子など、忘れられない話を伺うことができました。「貧乏」とはどういうことか、私たちの生活を見直すことの大切さを思い知らされました。

・一口にインドと言っても州によって言葉が違うとか、カースト制度の実態や結婚の様子など、びっくりすることだらけでした。海外青年協力隊員として海外に出かけ、異文化の中で働く人たちに敬意を表します。

・平和な日本に生れて、職業も自由に選べて幸せだと思いました。日本にはカースト制度がなくてよかったです。

・35 年前に観た映画で、6 時間に及ぶ 3 部作のインド映画がありましたが、その中で観たものと、今日のお話は同じものがありました。

・今回でなければ聞くことができないお話でした。インドの様子は、自分の思っていた以上で、大切な話を聞くことができて本当に良かったです。

・日本にいるとインドという国の実態がよく分からないですが、本日のお話で多くのことが分かりました。有難うございました。

・三木さんとは年齢も同じくらいの同世代ですが、本日のお話は本当に嬉しいものでした。

・インドは経済的に非常に伸びしろがある国だと感じました。貴重なお話でした。

・日本の青年海外協力隊員の仕事に関心を持ちました。